

「シジュウカラの巣箱の中」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋



今年の4月に営巣を始めた、北軽井沢のシジュウカラ。5月上旬までは、順調に抱卵をしていた。しかし、ある日の朝を境に、突然親鳥が姿を消してしま

い、6個の卵を巣箱の残したまま、2週間経っても戻ってこなかった。このままでは、次のペア(つがい)も営巣できないので、巣の中身を卵ごと取り出して、丈夫な紙箱に入れて、東京に持ち帰ることにした。

ラでは鮮明には映らなかった巣箱内の様子がよくわかった。巣草に使われていたのは、ほぼ100%ミズゴケであった。巣箱の周囲の森にたくさん自生している。卵を産む窪み(産座)の周囲には、綿のようなものが多い。どうもこれは、人工的な繊維のようである。



産座には、無傷の小さな卵が6個残っていた。巣箱内の高感度カメラではわからなかったが、ウズラの卵のような模様も、はっきり確認できた。



抱卵を放棄してから2週間も経つので、もちろん卵の中の雛は死んでいる。しかし、巣箱内の高感度カメ



5年生の子どもたちが「あのシジュウカラは、どうなりましたか?」と質問があったので、状況を説明し、実物を見せてあげた。はじめて見る、シジュウカラの巣と卵に興味津々。「わあー、ちっちゃい」「かわいい」「1個ほしいなあ」巣立ちできなかったのは非常に残念だったが、良い教材を提供してくれた。